平成 26 年度第 1 回小学校ゼミナール記録

2014 年 4 月 25 日（金）

於：広島大学附属小学校

司会：影山和也（広島大学准教授）

参加者：大滝（発表者）他 15 名

1. 検討論文

Heyd-Metzuyanim, E. (2013). The co-construction of ‘learning difficulties’ in Mathematics: Teacher-student interactions and their role in the development of a ‘disabled’ mathematical identity. *Educational Studies in Mathematics*, *82*(1), 341-368.

数学における学習困難の共同構成：教師と生徒の相互作用と「障害的な」数学的本人性の発達におけるその役割

2. ゼミナールの内容

「子どもが算数・数学を苦手としている」という事実の原因を学習障害に求めることは簡単である。しかし，数学教育にたずさわるものとしては，克服不能を含意する「障害(*disability*)」というカードによって学力不振の要因を説明する前に，克服可能性を示唆する「困難(*difficulty*)」の観点から学力不振の要因について検討に検討を重ねる必要があるだろう。検討論文の主張は大きく分けて以下の二点になる：

- 従来の枠組みでは「数学の学習障害」と同定され得る生徒 Dana の場合，その障害的状況は，認知的な障害というよりもむしろ情意的な困難によって引き起こされている。
- そうした情意的な困難は Dana の個性に由来するものではなく, 教師との相互作用によって発達させられたものである。

今回は初回の発表ということで，論文全体の要約と節構成を確認することで，論旨を大まかに把握した上で，2.2.1 節の直前まで読み進んだ。第 3 節に入るまでは本研究の目的と方法の説明および先行研究のレビューに関わる部分になるため，ゼミナール中の議論も内容確認やテクニカル・タームの定義に関するものがほとんどであった。ちなみに検討論文の節構成は以下の通りである：

1. 導入
2. 理論的背景
   - 2.1 数学学習における困難
   - 2.2 数学学習のコモグニション論
     - 2.2.1 学習における情意現象を研究するためのコモグニション論的ツール
     - 2.2.2 会話から本人化活動を取り出す
     - 2.2.3 暗黙的本人化と間接的本人化
     - 2.2.4 相互作用ルーチン
3. Dana の事例
   - 3.1 Dana と私の最初の数学的相互作用
   - 3.2 Dana と私の学習と指導の相互作用
   - 3.3 相互作用の結果：Dana の一人称本人化と三人称本人化の収束
4. 概要と結論
   - 4.1 理論的示唆
   - 4.2 メタ省察―どのように本稿の分析手法は Dana に対する私の三人称ストーリーを変え得たのか

（文責：原 清澄・大滝孝治）